

ヘアート・ロヴィンク講演会について

八〇年代のアムステルダムにおけるスクウオッティング（空き屋不法占拠運動）、自由ラジオ運動への参加をへて、九〇年代は東欧各国の民主化、情報メディアの自律した戦術的使用、旧ユーゴ内戦時における各国の独立系メディアの支援に携わる。

二〇〇二年にマサチューセッツ工科大学から、これまでの集大成とも言える論集『ダーク・ファイバー』*Dark Fiber*（新潮社から上野その他訳で近刊）と対談集『無気味なネットワーク』*Uncanny Networks*を刊行。前者はサスキア・サッセン、マーク・デリーなどに絶賛されており、後者はジジエク、スビヴァク、陳光興、マイク・ティヴィス、スーザン・ジョージ、上野俊哉などとの批評的な対話集になっている。その他の著作には英語圏では『運動に一撃をくらわす』、『メディア・フィルター』がある（ともにアウノトメディア出版）。

今回の来日は五度目になり、和光大学で講義に参加したのも三度目にあたる。インターネットやアクティヴィズムに関心をもつ広い範囲の人々にも聴衆になっていただけるように、都内の早稲田大学で講演を行なった。十二月三日のこの講演には七〇名ほどの参加者があった。通訳は上野によってなされた。

フィルタリングの政治と闘い…スパム・ウィルス・ノイズ ヴァーチャルな共同性の民族誌に向かつて

ヘアート・ロヴィンク

I Filter You,

Filterwars: Spam, Virusses and Noise

Towards an Ethnography of Virtual Communities

Geert Lovink

今日お話するのは、ネットワークについての民族誌（エスノグラフィ）の話です。民族誌という言葉を使いますが、自分に関わっている研究フィールドは従来の古典的な、人類学が想定するエスノグラフィやフィールドワークとはちょっと異なる

っています。というのは、普通、人類学で言うエスノグラフィというのは、他者の文化と社会について研究するのですが、ここでは自己が今関わっているネットワークを問題にするというものです。この民族誌は今や、自己とそれが帰属する文化、社会について、調査をしたりフィールドとしてそれを扱うという意味で従来のものとは異なっており、またそうした事をオルタナティブな側から見るようなエスノグラフィでもありません。

今オルタナティブな形で現在の文化を見る歴史、現在の歴史と言ったわけですが、もともと、ニュースといったものの定義というのは、五分以内に、この五分に起こったことを伝えるのがニュースだ、それは「新しいこと」だ、という定義があります。

す。歴史(学)の仕事というのは、起こったことを証明するか、説明する、ということですが、こと現在に関して、現在の歴史と言ったことを、なかなか人は言わないし、多くの人がやっているとは言えないのは、観察し、もとなる現象を観察して、それについて考えるにあたり、事態の方がものすごく流動的で早く動いているためです。例えば、インターネットのカルチャーで起こっていることを、観察して調査して、理論化してもなかなか追いつけない。だからこそ、現在の歴史というのは、要請されているけれど誰もできていない。しかも、それはただのニュースに、五分以内に起こったこと、新しいことの報告になっただけで、決して現在についての歴史にはならない。だからこそ、これは難しい。

けれども、インターネットの研究、インターネット自体を研究すると言っても、インターネットを使った研究と言ってもいいのですが、やはり今こそ、歴史的という態度をあえて言えるのではないか。むしろ、この研究自体が歴史の一部分でもあるわけで、現在と状況との相互作用的な関わり力学の中で現在を見るような方法が必要とされている。それをネットワーク文化の研究における民族誌の問題としてとらえたい。

インターネットの歴史を見る時に、基本的な区分設定として三つをあげることができます。第一の位相、アカデミックなフェイスとしてのインターネット。これは、九二年か三年ぐらいまでの状況段階で、ここでは研究者共同体の外の人はインター

ネットをほとんど使えなかった。まずアクセスできなかった。主に政府主導で使っていて、場合によっては、極めて大きな企業は関わることもあった。そうした限界内でパブリック、というのはいったいどういうものであったか。もちろん、ハッカーたちもいたし、アカデミックな共同体の中でもインターネットの使用というのは、後のギフトエコノミーと言われる、お金で交換するのではなくて、所有(権)を放棄したり贈与するという形を、もうすでに、この最初の段階の時にインターネットは持っていたわけです。ギフトエコノミーとか、非政府活動というのも、実はここにルーツがあります。いずれにしても、ごく最初のフェイスでは、政府の力、政府のコントロール、というのは、テクノロジカルにも、財政面でも、インターネットの最初のフェイスを支えていた。言いかえれば、そこには、パブリック、公衆、もしくは公共的なもの、公共圏といったものは、まったく無かったわけです。

つまり、ユーザーとインターネットを動かしている人、具体的に作っている人、これは、プログラマーから実際にそれをネットワークに維持している人まで含まれますが、ユーザーと作る側の間に、なんの区別も無いような、舞台というのがこの時期あった。ネットはそれだけ閉じられていたということですね。二番目の段階というのは、皆さんも存じのワールド・ワイド・ウェブに始まる爆発的なインターネットの一般による使用増加と成長の始まりです。これは、商品化の波、それから民営化 privatization などの所有化の動きです。つまり第一段階に比

べると、どんな金次第、企業のものになってきた。いわゆるドットコム・ブームというのは、その始まりでもあり、終わりや極限でもあった。これは、ある意味でインターネット社会の黄金時代でもあり、そこには『ワイヤード』のような雑誌や様々な情報が流通し、インターネット・イデオロギーとも言えるような考え方も広がったわけですが、ただしこれも経済の場合と同じように、クラッシュや不景気というものに直面せず、実際、ナスダックの倒産に見てとれたように、爆発や始まりであると同時に、これは極限、終わりでもあるという側面があった。

第三の位相、段階というのは、誰でもわかるように、ポストドットコムエイジの段階です。これはユーザーに、ある種の限られた足かせがどんなはめられていく状況で、これには大きく政治が関わっていると云えます。国家、もしくは巨大企業の側が、ユーザーがやっていることを、監視したり、把握したりすることがひじょうに強くなる時代です。何十億とはいえないけれど、その半分ぐらいの数のコンピュータがこの地球上で使われているわけですが、一方、ユーザーに課せられた制約というのは強くなっている。

同時に文化の可能性と言うか、それぞれの地域や領域で使っているインターネットの使い方は多様にわたっていて、実際に中国やブラジルでの使い方とか、ネットの量的拡大だけではなくて、その質的な多様性というものも顕著になってきた。アメリカやヨーロッパでも、インターネットの可能性の核心部分に

関わっている人たちというのは、そういうことに敏感です。つまり、フリーソフトウェアやオープンソースの活動や改善というのは、非西洋の社会でインターネットがどう使われているか、あるいは非西洋の社会でどう使うか、あるいはどう繋がるか、といったことと関わります。テクノロジーの別の使い方というのは、文化的な多様性というものと比例します。ゆえにソフトウェアの自律した使い方を発展させることは、ユーザーとその活動や動きの多様化の問題でもあるわけです。例をあげれば、もう線であってはいないワイヤレスのネットワーク、いわゆるP2Pのネットワークやコミュニケーションの問題などがそうです。さらにそこでのコピーライト（著作権）はどうするのか、海賊的な使用という従来からの問題をどう考えるのか。あとでウェブログについて、そういう点からお話したいと思います。

この第三段階についてよく人が言うのは、この位相は余りにも経済的に使われすぎているというのか、ほとんどネットがマスメディアのようになってしまっているのに、資本主義の側がまだポスト・ドットコム時代のネット使用に対応しきれていない。にもかかわらず、みんなアマゾンなどを使っているわけですね。

インターネットの研究と言った場合に、この研究も他のフィールドワークや民族誌がそうであるように、起こっている出来事とのぶつかりあいというが、いろんなトラブルに出会ったりすることが重要な要素になります。でも、その、研究とか調査

とかいうのは、その定義からして存在論的に否応なく「地図の書き換え」というものを伴うわけだし、自分の視点を変えていくというか、立場を変えていく、変形する、ということを含むでしょう。ただし、インターネットの研究でしばしばありがちなだったのは、現在起こっていることを調査にもとづいて理論化するというよりは未来、その先の話をする、「この先、こうなっていくよ」という予言的言辭が多くなりがちです。インターネットの話は思弁的＝投機的 *speculative* な理論と結びついていました。ありがちなマスメディア批判が空想的なものになるように、この言説というのもしばしば夢見るような、空想的なものになっていて、本来の役目（地図の書き換えや自己の視点の転換）を果たさずに夢見がちなものになる。その時、いくつかの電腦グループというか、サイバー導師みたいなものが一種のファクションとしてあっちにもこっちにも現れることが起こったわけです。しかし、これは先ほどお話ししたクラッシュ、ドットコムのある種の経済的挫折というものと一緒に、絶対終わったはずです。

今の例にあてはまる名前をあげれば、ハワード・ラインゴールドが九〇年代に行っていた作業、ヴァーチャル・リアリティ（仮想現実）に対する彼の仕事や「ヴァーチャルな共同体」という言葉で彼が考えていたことがそうですね。他には、やや理論的にはずさんですけど、コンピュータネットワーク時代の精神分析を考えていたシェリー・タークルの考え方、つまりデイスプレーを「第二の自我」として有線化されたパーソナリティ、

ネットワーク化されたアイデンティティを考えるとという発想もありました。そしてデジタル的であることというのを検証、分析したニコラス・ネグロポンテ。こうした人たち、つまりサイバーネットワークチャーの黄金期の人たちの議論に共通するのは、一つは身体無しの状態である「脱身体化」という点。さらに「集団的知性」 *collective intelligence*、みんなで共同作業するとか、みんなで考えるとか、みんなで作業しているうちに形成される、知のありようです。しかし、これは良い話ばかりではなく、実は極めて保守的な、リバタリアニズムや疑似科学にすぎない新古典派経済学の市場万能主義、つまり自由競争や弱肉強食、ほとんど「デジタル・ダーウィニズム」と言えるものと相容れてしまうということを忘れるわけにはいかないし、人々はこのことを現に批判しようとしていたわけです。どちらにしても言えることは、この時代には利権や利害の広がりという視点でしかやっぱインターネット経済というのは見られていなかったからこそ、こうした主張にのっていた人もドットコムエッジの崩壊、市場におけるインターネットの本来の可能性の終焉について誰も予期しえなかったのです。

これから少しウェブサイトを紹介しながら進行しましょう。最初に見て貰ったのは、トロントやロンドンのアカデミックな背景を持った、いわゆるインターネット研究についてのものです。インターネット研究という言い方はトリッキーです。つまり、インターネットについての研究リサーチなのか、インター

ネットを使ったものなのか、ということについては、二重に話
がなっているし、ここは全く区別できないはずです。だからこ
そ、「民族誌」の方法の問いが重なってくる。社会学、メディア
論、メディア研究、メディアアート、実はいろんな領域のサ
イトがあります。私のバックグラウンドはそんなに社会科学とか
社会学だけではなくて、むしろ「アクティビズム」activism、
実際に何かをやること、文化実践に関わっています。とりわけ
九五年に設立されたネットタイム・メーリングリスト（net-
time）というのは、世界中のアクティヴィズムや、文化実践や
アートを紹介したり、インターネットにおける倫理問題をどう
考えるのかといったことを九〇年代半ばからやっていたわけ
です。この手の人たちが、一番直面した問題、そして今もしてい
る問題は、情報過剰（インフォメーション・オーバーロード）、
つまり情報がありすぎて、どれを選んでいいかわからないとい
う状態です。ネットタイム・メーリングリストは、今は英語だ
けではなく、いくつかの西洋語（ドイツ、フランス、スペイン、
イタリア……）それからアジアの言語も含めて、どんどん今も
増えています。

今度はいろんなアーカイブを見て貰ってます。このアーカイ
ブは、過去に寄せられた情報や、多様なエッセイが載っていた
りするわけです。ここでインターネットというメディアに最も
特徴的なことは何だろうかということから言えば、電話とイン
ターネットは基本的に異なるわけです。もちろん、メールを使
って電話のように会話することもありますが、ネットが

一番ネットらしいのは、情報を検索して取り出したり、散らば
っているものを集めてそこから、新しいものをつくり出すとい
う所にある。そしてまたそこで検索し、取り出し、あちこちか
ら引き出してきたもので、新しいものを作り出すところ
には、必ず同時にバーチャルな共同体というものが成立します。
ここには別の世代の経験であるとか、別の考え方をしている、
別のやり方をしている人から、何かを受け取って、自分のやっ
ていることに入れていく可能性があります。問題は、どうやっ
てメーリングリストの中で司会をし、どれを載せて、どれを載
せないかというフィルタリングにあります。

九〇年代の初頭にかけて、いわゆるニュースグループという
形での使用は、ゲームをやる人たちの間で、情報交換の実践が
あったわけですが、今のウェブの、つまり一人の個人がやって
いるものが、もう一回、別の個人とあわさったり、別のコレク
ティブな作業と繋がったりする、つまり、フィルタリングは一
人のもではなくなって、フィルターの複数の人間や、複数の
個人がやっているものが、グループのフィルタリングに関わっ
たりする。ここに、インターネット・ヴァーチャルコミュニテ
ィの進展、進化のようなものが見て取れるんじゃないか。

さつきモデレーションとか、フィルターをかける問題が、実
は情報過剰に対応する手だてであるということを言いました。
ネットタイムを例にとると、だいたい三千人ぐらい参加してい
て、フィルタリングを行っているのは何人かのコアメンバーで

す。対照的な例として、九七年から続いているスラッシュドットがあります。これは、もう、完璧にユーザーがお互いにフィードバックできるようなっている。たとえば、スパム（どうでもいい広告などのメール）を定義するさい、これを特定の人で判断するのではなくて、ものすごい限界質量に達するぐらいの数でできるようなシステムはないか？ 何がスパムで何がそうでないか、何がぐずで何がぐずでないか、という規定について、いろんな人がメッセージを書くようなものはないか。ある種のウェブログがうまくいっているのは、誰かが言ったことに對して、いろんなコメントができる、スレッドも作れる、さらに基本的にこれはだめだと言うことができる、お互いに、その繰り返し、そこに成立するフィードバックの共同作業みたいなものが何千万人もの間である、ここにたまたまスラッシュドットコムみたいなものが残っている理由があるのではないでしようか。

数分前に見て貰ったのは、反グローバル化シーンの運動のサイトなんです、これは基本的に無料で、基本的にどのアクティヴィストにも開かれている、優秀なニュースソースを提供している。この手のものには、二つ戦略があつて、一つ目は、ものすごく大きい規模で動いていることを、それぞれの、自分たちの運動や地域の文脈に局所化（ローカライズ）するという戦略やストーリーを、ダイレクトに大きい出来事としてそのまま伝えるのではなくて、むしろマクロの出来事や動きを、ローカルな次元にする。二つ目の戦略は、独立したメディアのセン

ター 矛盾した言い方ですけど、マスメディアとか、国とかの、センターじゃなくて、インディペンデントな、メディアセンターというものがあつて、大きな経済会議、G8やダボス会議、あるいはCO2削減をめぐる京都会議などでは、必ずそれに対するアンチの集まりとかデモがあるわけですね。プレスなどのあてがいぶちに用意されたメディアセンターではないものをインターネット上でやっている。どこの大規模な会議でもデモがつきもののように、「インディペンデント・メディアセンター」（独立系メディアの集まり）というものが機能しうし、実際にやっている。二つ目の戦略の場合は、ローカルな文脈から離れて、そのデモの動きとか、メディアの使い方などにより多く通じ、オープンパブリッシング、多くの人に開かれた発表、発刊、刊行みたいなモデルがあり、この可能性と意味は印刷メディアだけではなくります。オープンパブリッシングの概念モデルはスラッシュドットコムにおける、コメントの応酬とはちよつと違うんじゃないか。

たしかにスラッシュドットコムで起こっているのは、一種のコメントづけの「民主化」ですが、それだけではパブリッシングとは言えない。パブリックな場面で、自分たちのやっていることを、発表するってことは、実は言えないんじゃないか、ちよつと違うんじゃないか。何かを書いて、それで、議論に参加するということはあるけれども、自分たちのストーリーを語る、発表する、能力としての、としてオープンパブリッシングを定義するとするならば、その単に議論に参加すると言つことで

は不十分です。

今見てもらってるインディペンデント・メディアセンターのサイトでは、自転車で街を移動することで自動車型の都市を批判する「クリティカル・マス」の運動や、イラクのニュースの話とかが入ってます。写真とビデオも入れることもができる。これはユーザーによってフィルターされているのではなくて、ちゃんと編集委員のようなものが何人かいて、その意味ではセンター（中心）があるわけですね。何人かの人がやっているわけです。そこにはフィルタリングのメカニズムがあるわけですね。最近出した自分の本もこういったことを扱っていて、単なるコメントをつけていくところから一歩出たフィルタリングの問題、ボルノをどうするのかとか、反ユダヤ主義的、反シオニズム主義的な言説がインターネット上に飛び交うことをどう考えるのか、その問題としても一回オープンパブリッシングという概念を継承しているんだ、ということですね。

オープンパブリッシングというのは一つの大きな実験だと言うことができます。いったい、インターネットとはなんなのか、何ができるのか、何をするのか、それは、根本的に従来のマスメディアと何が違うのか、ということ巡る実験でもあるわけです。

インターネットの本当の革命的意味は、オープンパブリッシングにあって、ネットワークを構造、構築する側から、どうや

って参加するかという点にある。単にメッセージ間でコメントつけられるみたいなものは、常にいっぱいあるわけで、そうではなくて最初に述べた民族誌的な調査や相互行為の問題ですが、外側から研究するのではなく、内側から環境を、自分たちがいるんな環境をつくり出すような形で集団的な知的作業としてのリサーチというのがある。

科学的対象として他者、相手を扱う、リサーチ、フィールドワーク、エスノグラフィではなくて、リサーチ自体が、自らの環境やフィールドを作り出すような場と作業、これを自分はオープンパブリッシングと考えていて、オーストラリアのマフュー・アンソンという人が運営しているものも、そういう場として解釈できないか。これはそういう意味でもはやスラッシュドットとは違うものです。つまり、ソフトウェアの構造自体がネットワークへの参加を規定しているというのは、当たり前のことなんです。ユーザーにどういった参加をさせるか、誰がソフトを書くのか、つまり、ここには、流通する情報の司会調整（モデレーション）やフィルターだけではなくて、ソフトウェアのフィルターというか、誰がどういうプログラムを書くのかということと関わってきています。そのかぎりにおいて、どういうふうな、人が使いやすいように書いていくか、あらゆる方向からやってくる圧倒的な数の、立場も解釈も異なる情報を、どう扱うか、という問題になっていくと思います。

今、関わっていることをちょっとお話いたします。

オーストラリアのグループで八百人ぐらいの、すでにできあがっているサイバーカルチャーの集団があつて、実際にみんなであつても行なうインターネットの研究のためのグループがあるんですが、ネット上でやりとりをするだけじゃなくて、実際に会うオフ会をやる。今年はシドニーで、来年にはブリスベン、来年はパースで、この次はニュージーランドでもやるといったような会です。会つてどうするのかと言つと、実は全部オープンパブリッシングに関わることをして、ネット上で取り交わされた研究とその意見交換というものを、もう一回「グーテンベルクの銀河系」に差し戻す、つまり、紙のメディア、新聞やジン（ミニコミ）、パンフレットにも戻してみることです。

さらにニューメディア教育がどうあるべきか。とりわけ、ネット上で教えるリモート（遠隔）教育ということはどうなのか。自分がアジアとの関わりの中で、オーストラリアという他と離れた場所で活動している以上、アジアと何かをしようとするときに、ただ教えたりコミュニケーションするというのではなくて、離れたネット上での教育モデルというものが考えられなくてはいいですね。これもまたネットの多様化と言つ問題に関わってくるわけです。ある時にはアカデミックな査読のシステムをオンライン上に形成して、実際にアカデミックな雑誌を出して、みるということだつてやる。印刷媒体という「グーテンベルク銀河系」との再会は、出版社を作ると言うことだけではなくて、プリントが出まわると言う形式をネットから直接やる仕事と関わりがあるわけで、このように、様々な取り組みや新しい試み

が広がっています。

こうした取り組みを実際ネットのなかで読んだり、調査したり、あるいは直接のインタビュによって見ていくと、まだまだメールの伝達に頼っているという側面はたしかにあります。サイバーカルチャーはある限られた可能性でしか機能してない。しかし、フィルタが大切ということでは、ウェブログで見たような実験をどうやって、今後われわれがどのように様々に作っていくのか、何千人の人が参加しているところと異なる話題が選ばれ、どんな特集、どこに焦点を絞るか、と言う時にどうやって、これを整理し、ふるいにかけていくのか、ということとは、依然として重要なわけです。

別の例で「ディスコードディア」Discordiaというサイトがあつて、これも似た試みです。やはりウェブログ同様、同じアイデアを持っていて、似た構造をスラッシュドットと共有しています。二、三時間のうちに、自分の出した意見に対して、五〇名から二百名の反応が返ってくる。まあ多分、規模としてはこれがぎりぎりなんだろうと思います。これ以上になると、自分もインフォメーション過剰に対応できないし、誰もセーブできない。「ディスコードディア」がスラッシュドットとちよつと違うのが、フロントページというものの使い方、使い勝手の良さ、そこに分類勝手の良さというものが、ちよつとあります。ニューメディアのメディアアーティストや、アクティヴィズムに参加してきた人が、ネット上での共同作業、相互行為により、その運動とか、実際に作品に作る場の雰囲気や経験から、むしろこの

ような試みに敏感になっています。

ただ安く、全員がアクセスできるデータベースと言ったものではなくて、そういうデータベースを作るとか、アーカイブを作ったとたんに、多額のお金の関わる権利問題が関わっていて、二重三重の意味で、このアカデミックな出版形態は、自分の考えているオープンパブリッシングに比べて古くさいものにもなっていく。普通の大学での学問研究とか、従来の出版の形態で何かを発表するアカデミックな形が、われわれが考えているオープンパブリッシングの可能性の域、あるいは、それが提起している問題に追いつくには、さらに数年を要するのではないか、というのが、今の印象です。

マシュー・アリスンの定義に戻れば、オープンパブリッシングの創造的な側面は、案件やニュースをユーザーに対して透明な形で接触でき、また流通できるように、お互いにフィルターをかけあったり、共同で何かオルタナティブな情報ニュースの流通や配給が可能になるようにする、ということになります。小説を例にとれば、小説というジャンルは昔から、近代のはじまりからあるわけですが、これを印刷メディアで出すか、オンラインで出すか、こう考えた時に単純に見てしまうと、出版にのらなかつたり、出版社から断られたものが、オンラインでのるみたいにとられてしまう。小説というものがもしここでオープンパブリッシングということで捉えなおすというならば、小説というジャンルそのものの再定義みたいなことが行われる作業があつて初めてオープンパブリッシングになる。オープンパ

ブリッシングというのは、みんなが紙以外の形態で、そのネットで見ながら見られるように、読めるようになる、というだけだったら、出版のフィルターから落ちたものが単に載るだけになってしまいます。

日本でも世界でも、多くの人がデジタルな装置を使って「物語を紡ぐ」ということをすでに始めている、それが、従来型の小説のクオリティと比べて、どうかというと、はなはだ問題ではあるわけですが、それぞれのメディアに特有の形態、特有の混乱形態を通して、小説という制度、ジャンルというものの再定義が行われていくということに可能性があるのではないか。物語とは何か、そのジャンル性とは何か、むしろ、このことを問うことが、物語になつていく、という形態が考えられます。ネットワーク（時代）の民族誌はここに可能性の核心をもっている。これは実はしかし八〇年代初頭、ハイパーテキストというのがマックによつて配られたとき、あるいは六〇年代にコンピュータの小さなパソコンを夢見たヒッピーたちが考えていたことであつて、いったいどのくらいの範囲で自分が伝えたい情報のコンテンツをお互いにリンクさせることができるのか、それは単にAからBに送るというだけじゃなくて、どれだけたくさんの人と、どれだけ自分と異なったジャンルのコンテンツをリンクできるか、アップルが提供した問題は、そうしたプラットフォームだったわけです。

実はここには、ある歴史と伝統があるわけです。決定的なこととは、いったい我々自身のやりかた、というのはどこにあつて、

それぞれのテクノロジーに固有の、しかもわれわれにとっても特異な何ものかを探す、これがオープンパブリッシングの概念のやっっていることだし、あるいは、やってきた、すでに起こった、六〇年代にあったかもしれないし、八〇年代にもあったかもしれないことなのです。

本講演に関連するサイト

www.adbusters.org

www.critical-mass.org

www.reclaimthestreet.net/

www.discordia.us

www.slashdot.org

www.indymedia.org